

無形民俗文化財
(岡崎市・西尾市指定)

つつみどおりてなが
堤通手永

お た おうぎ まつ り
御田扇祭り

令和4年7月17日（日）下三ツ木町



三社神明社

御田扇祭りの由来

江戸時代より岡崎藩に伝わる「御田扇祭り」は、正式には「皇大神宮御田扇祭り」といいます。土地の人々は、この祭りのことを、親しみを込めて「扇さん」と呼んできました。「御田扇祭り」は、手永（地域割り）ごとに、それぞれの大庄屋を中心に行われてきた祭礼です。

「五万石でも岡崎様は、お城下まで船がつく」といわれてきたように、岡崎藩は五万石の大名でしたが、矢作橋の管理料として一万石が附加され、実際は六万石でした。その藩を「手永」と呼ぶ六つの区分に分け、その最高責任者として大庄屋を位置づけました。大庄屋は世襲制であり、岡崎藩における村づくりの中心を担いました。これらの仕組みを藩の支配体制に組み込むことで、安全と治安のために利用したと考えられます。

「岡崎領は五万石ゆえ一万石に御神輿を一つずつおいて五穀豊穰と城下町の平和を祈願させ、その費用を少し領主が出した」という記録があります。また、山方手永御田扇行列の日月旗にある「本」の文字や「立葵」の紋は、明らかに岡崎藩主本多家との関係を示しています。

伊勢神宮で行われてきた神事に「御鍬祭」があります。ご神体とみなされている鍬は、農民にとって重要な道具でした。その御鍬を奉じることで、五穀豊穰を願いました。また、もう一つの神事に「御田植祭」があります。この中には、虫除けとして檜製の大きな扇で田を扇ぐ神事がありました。これに因んで「御田扇」と呼びました。

岡崎藩では、伊勢神宮から拝受してきた御鍬と御田扇を、各手永の神輿に入れました。そして、田植えが終わるとのぼりを立てて村々を巡回しました。稲を害虫や疫病、風水害から守り豊作となるよう祈願したわけです。この行事は、江戸時代の明和年間に始まったといわれています。御田扇祭りというようになったのもこのためです。御鍬と御田扇は、いつの間にか、皇大神宮のお札に変わりました。しかし、今も昔も、「御田扇祭り」が、五穀豊穰と人々の幸福を願ったお祭りであることに変わりありません。

手永の名前と大庄屋	御田扇祭りの歴史
<p>堤通り手永 (中之郷町 長嶋家 11,195 石 別に岡崎藩廻りとして 1,115 石)</p>	<p>手永の中では最も盛大に行われている地域である。毎年7月中旬から下旬の日曜日に行われ、御神輿は1年に1つの町を巡回するので、20年に一度「扇さん」をお迎えする。巡回順序は、中之郷、上青野、高橋、上合歓木、下合歓木、高落、新村、西浅井、東浅井、安藤、福桶、下三ツ木、上三ツ木、下青野、在家、土井、牧御堂、法性寺、宮地、赤渋である。</p>

